文化学園リポジトリ
Academic Repository of BUNKA GAKUEN
服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学
Bunka Gakuen University
文化服装学院
Bunka Fashion College
文化ファッション大学院大学
Bunka Fashion Graduate University
文化外国語専門学校
Bunka Institute of Language

Title	中級レベルの聴解力を伸ばすための試み : 学習者は何を聞き取っているのか
Author(s)	国頭, 美紀; 廣田, 周子
Citation	文化外国語専門学校紀要 24(2011-02) pp.33-54
Issue Date	2011-02-01
URL	http://hdl.handle.net/10457/1253
Rights	

https://bunka.repo.nii.ac.jp/

(紀要第 24 号)

中級レベルの聴解力を伸ばすための試み
～学習者は何を聞き取っているのか～

日本語科　専任教授　**国頭美紀**
専任教授　**廣田周子**

(2010.9.1 受)

要　旨

学習者の聴解力を伸ばすために、新たな試みを行った。

この試みではＬＬ教室[註1]を使って「学習者一人ひとりが何をどのように聞いているのかを把握すること」を基本方針とした。その結果、「部分を聞き取ることはできても全体的な内容を把握する力が弱い」「数字は聞き取れるが、それが何を表しているかが聞き取れない」「聞いた回数が多い者が正しい答えを聞き取れるわけではない」などの問題点が明らかになった。

＜キーワード＞　聴解力　聴解の指導　聴解練習　「予測」のストラテジー
数字の聞き取り　メモ取り　ポイントを聞き取る力　個別指導

１．はじめに
２．基本方針
３．対象・期間
４．練習内容
５．結果
　５－１．「予測しながら聞く練習」（全５回）での気付き
　５－２．「数字の聞き取り」での気付き（全２回）
　５－３．考察と改善点
６．その後の取り組み
７．今後の課題

注
参考文献
資料

1．はじめに

ここ数年、「日常会話では聴解力に問題があるとは考えられない学生が、学内の聴解試験での得点が伸びない」という声が教師間で聞かれるようになった。本校では以前より『楽しく聞こう』[注2]や各レベルで作成した聴解教材を使用して指導を行っており、指導方法は大きく変わってはいない。また学内での評価法も大きく変更はしていない。にもかかわらず聴解試験での成績が伸びないのはなぜか、また、聴解力を伸ばすためにはどのような練習方法が有効かを考えるため、2008年度の学生を対象に、さまざまなアプローチで指導を試みた。

2．基本方針

これまでの聴解の授業は、クラス全体に聞かせ、解答、解説まで、すべてクラス単位で行っていた。そのため、学習者一人ひとりがどのような聞き方をし、どこでつまずき、どのように考えて答えを導き出しているのかがわかりにくかった。そこで今回の試みでは「学習者一人ひとりが何をどのように聞いているのかを把握すること」を基本方針とした。そのため授業では、ＬＬ教室を利用し、学習者が自分のペースで聞けるようにした。また必要に応じて、繰り返し聞くこともできるようにした。

基本方針に基づいて、聴解の授業を行った後、学生用に配布したプリントをすべて回収、コピーし、学生が書いたメモや解答を見て分析を行い、その結果をもとに次の教材を作成して聴解の授業を行った。

3．対象・期間

対象としたのは2008年度４、５組に在籍した学生で、クラスには2007年10月に本校に入学した学生と2008年４月に入学した学生が混在していた。

１年の間に数回のクラス替えがあり、この試みのスタート時と終了時では、学

生の構成に多少の違いがある。以下はスタート時と終了時の学生の国籍と人数である。

(スタート時)		(終了時)	
台湾	14名	台湾	16名
韓国	8名	韓国	5名
タイ	3名	タイ	4名
中国	3名	中国	8名
ドイツ、モンゴル、ラオス、ミクロネシア	各1名	インドネシア、	2名
		シンガポール、モンゴル、ミクロネシア	各1名

このクラスは、4月の時点で初級後期[注3]を学習しており、翌年3月の卒業時には中級後期終了レベル[注4]であった。聴解指導の試みを始めたのは中級前期[注5]を学習中の2008年6月で、翌年3月まで続けた。

4. 練習内容

今回行った練習は「予測しながら聞く練習」「メモを取りながら聞く練習」「数字の聞き取り」などである。

1）予測しながら聞く練習（6～7月　全5回[注6]）

これは『聞くことを教える』（国際交流基金）に挙げられていた聴解のストラテジーのうち「予測」のストラテジーを強化する目的で行った。モノローグ（『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』三井豊子他を使用）を聞く前に、教師がそのニュースのテーマを学習者に伝え、学習者がそのテーマについて知りたいと思うことやニュースに出てくるであろうことを予想して、質問の形で紙に書き、その答えを探しながらニュースを聞く、という練習である。（5－1．で詳述）

2）メモを取りながら聞く練習（10月　全3回）

短いモノローグを聞きながら、どの程度メモが取れるか、またどのようにメモ

を取っているかを教師が知る目的と、メモを取ることの重要性を学習者に伝える目的で行った。授業では白紙を配布し、モノローグを聞きながらメモを取るよう指示する。その後、メモ用紙を回収し、聞き取りとは関係ない授業を行う。授業の最後に回収したメモ用紙を返却、簡単なクイズを配布し、メモを見ながら答えを書かせる。聞き取った直後にクイズをすると、メモを見なくても記憶に頼って答えることができるため、このような方法でメモの必要性を伝えようと試みた。

3）数字の聞き取り（11 月　全2回）

ニュースなどで数字が出てきた時、正しく数字を聞き取ることばかりに気を取られ、その数字が何を表すのかを聞き取れない学習者がいたために作成した教材である。その数字が何を表す数であるのかがわかるということは、ニュースのポイントを聞き取ることにもつながる。学習者が数字だけに集中してしまわないように、数字が何を表しているのかを、三択などで答える形式で問題を作成した。（5－2．で詳述）

4）レベル別ディクテーション（1～2月　全4回）

今回の聴解練習の基本方針に基づき、学習者一人ひとりのレベルにあった会話を聞かせ、ディクテーションを行った。これはゆっくり短い文を話す初級レベルの会話から、関西弁のスピードの速い会話まで4レベルのＣＤを準備し、パソコンを利用して各自が選んだレベルのＣＤを聞きながらディクテーションをするというものである。日本人の話し方に慣れ、卒業後の日本人とのコミュニケーションがより円滑にできるようにするために、卒業間近の1～2月に行った。

5）ニュースを見て伝える（3月　1回）

聴解指導の最後に、これまで学習してきたことの総まとめとして、テレビのニュースを見て、その内容をメモし文章にまとめ、そのニュースを見ていない人に伝えるという授業を行った。ここで扱ったのは事件や事故のニュースではなく、流行のものを紹介するような軽い内容のもの（「野菜工場」「お菓子が作れるおもちゃ」）である。各クラスで異なるニュースを見せ、各自でニュースの内容をまとめた後、隣のクラスの学生と内容をお互いに説明し合う。その後自分のクラスに戻り、今説明を聞いたニュースを見て、その説明が正しかったかどうかを判断

するという授業を行った。

5．結果

聴解の授業で学習者の様子を観察したり、学習者が書いたメモや解答を分析したりする過程において、多くの気付きが生まれた。筆者はこれらの気付きや分析の結果などをもとに、次にどのような指導を行えばよいか話し合い、教材を作成して授業を行った。このような試みの中で、学習者の問題点が鮮明に浮かび上がってきた「予測しながら聞く練習」と「数字の聞き取り」について以下にまとめた。

5－1．「予測しながら聞く練習」（全5回）での気付き

4の1）で述べたように、この練習の内容は「学習者が自分で質問を作成し、その答えを探しながらニュースを聞く」というものである。学習者は、質問を考えることでニュースの内容を予測し、質問の答えを探すという目的を持ってニュースを聞くことになる。授業では、まず、学習者用の質問シート（資料1）を配布して質問を考えさせ、質問シートに記入させた。そして、「質問のほかにわかったこと」と「聞いた回数」を書くように伝え、ニュースを聞かせた。

第1回「地震」（資料2）

このような練習のやり方は初めてであったため、「学習者がこの練習の内容を理解し、どの程度できるかを教師が把握すること」を目標に授業を行った。

ニュースの内容が地震ということで、多くの学習者が「いつ、どこで起こったか」「震度はどのぐらいだったか」「死者やけが人はいたか」などを質問にし、ほとんどの学習は正しい答えを聞き取ることができた。しかし、32名中24名が3回以上聞いており、学習者にとって難しい内容であったようである。また、「3．質問のほかにわかったこと」についても、32名中11名が何も書いておらず、3分の1の者が質問の答えを聞き取るのに精一杯であったと考えられる。質問以外の聞き取りでは、地震が起こった際の大切な情報である津波の情報（「津波の心配はない」）を、聞き取った者は32名中6名だけであった。正しく聞き取れなかった例は「新幹線が一時運転を見合わせた」という部分で、6名が「×新幹線が1時間運転を見合わせた」と書いており、「一時」という未習の語彙を「1時間」

と誤って理解したと思われる。この部分を正しく聞き取れたものは４名だけであった。

第２回「修学旅行」（資料３）

このニュースで学習者が考えた質問は「どこへ行ったか」「何泊したか」「費用はいくらだったか」「旅行中何をしたか」などであった。授業の様子や提出したシートから、学習者は数字や地名を聞いたら取りあえずメモをする習慣が身についていることがわかった。このニュースに出てくる数字は、「費用の例」「海外へ行った学校数」そして「参加した生徒数」の３つが主なもので、多くの者は正しく聞き取ることができた。しかし、修学旅行の行き先について見てみると、聞き取った地名を並べた者が多く、「海外に行った高校のうち最も多かったのは韓国と中国である」というポイントを聞き取った者は27 名中５名であった。

提出されたシートの中で、ある学習者が「主題は最近、海外に修学旅行に行く学校が増えてきた」と書いていた。その記述から、「ニュースを聞く場合、聞き取ったニュースのポイントは何かがわかることが何よりも重要である」ということに筆者は気付かされた。そこで、３回目からは「ニュースのポイント」を必ず書くように指導することにした。

第３回「大学生の生活費」（資料４）

学習者が考えた質問の中で多かったのは「支出はいくらか」「生活費はいくらか」「一番多い支出は何か」「収入はいくらか」「アルバイトをしているか」「誰からお金をもらうか」などであった。ニュースを聞く前に「ニュースのポイント」を必ず書くように伝えたため、31 名中29 名がポイントを書いていたが、「２年前に比べて、大学生の生活費が減った」と正しく書いたのは17 名だけであった。

この回では、「数字を聞いたら取りあえずメモをする」ことに関して、多くの学習者はどんな桁数の数字であっても、一の位まで正しくメモできているが、その数字が何を表すのかが聞き取れていないことが問題点として浮かび上がった。

このニュースで間違いが多かったのは「大学生の学費や食費、光熱費など、年間の総支出は平均184 万６千200 円で、このうち学費を除いた生活費が83 万７千300 円となり、２年前より４万６千円減ったということです」という部分である。

「184 万6千200円は年間総支出である」と正しく聞き取った者は、この数字をメモした15名中10名で、「年間生活費」（2名)、「光熱費」（1名)、「光熱費と食費」（1名)、「1ヶ月に必要なお金」（1名）などのように誤って聞き取った者が5名いた。また、「83 万7千300円は年間生活費である」と正しく聞き取れた者は、この数字をメモした16名中4名で、「学費」（6名)、「学費と生活費」（2名)、「学費＋？」（2名)、「年間支出」（1名)、「希望の生活費」（1名）などのように間違えて聞き取った者が12名いた。特に多かったのは「学費」と誤って聞いた6名で、「学費を除いた生活費」の中の「学費」は聞き取れたが、「を除いた生活費」の部分が聞き取れなかったため、数字が表す意味を誤って理解してしまったものと思われる。

第4回「登校拒否」(資料5)

ここでも、第3回と同様に数字が何を表しているのかが聞き取れていないことがわかった。学習者が考えた質問は「どうして学校へ行かないのか」「登校拒否の生徒は何人ぐらいいるのか」「登校拒否の生徒は何パーセントくらいか」「登校拒否はどのぐらい増えたか」「小学生と中学生とどちらが多いか」などであった。

数字の部分で、一番間違いが多かったのが「30日以上の欠席者のうち学校嫌いを理由にあげた児童・生徒は、小学生が7万4千757人でした」という部分であった。「7万4千757人」という数字を書いた14名のうち数字の意味を正しく聞き取っていたのはわずか3名で、「小学生の不登校者数」と間違って聞き取ったものが10名もいた。

その他の間違いの例としては、「小学生と中学生とどちらが多いか」の質問について、質問を考えた4名全員が「小学生は416人に1人」「中学生は61人に1人」とメモしているにも関わらず「小学生が多い」と答えていたことがあげられる。これは「416人」と「61人」の部分のみを比べたため、このような間違った理解をしてしまったのではないかと推測される。また、「登校拒否の生徒は何パーセントくらいか」という質問について、このニュースの中ではそれに関して何も述べていないにも関わらず、質問に答えた4名中3名が「15.5％」（正しくは増加率を表している）と答えた。これは「％」という語彙だけを聞き取って、登校拒否の生徒数を述べていると誤った理解をしたものと考えられる。

第５回「たばこの煙」（資料６）

この回のニュースは「胎児とたばこの害」について短くまとめたものであったため、学習者に質問を考えさせず、たばこの害について聞き取るように指示した。ニュースの内容が比較的わかりやすく、数字もほとんど出てこないため、ほとんどの学習者が「母親がたばこを吸わなくても、たばこの煙に囲まれていると、生まれてくる赤ちゃんの体重は、平均100 g以上少ない」「母親が禁煙をしても、家族や職場の同僚の煙にさらされていると、一日にたばこを３本から５本吸うのと同じことになる」という２つの害を正しく書いていた。

５回の聴解練習を行った結果、数字が出てくるモノローグの聴解を指導する際に大切なことは、「ただ数字書き取るのではなく、その数字が何を表しているかということも聞き取ってメモすること」ではないかという結論に達した。そこで、数字が何を表しているか聞き取る力をつけると共に、ニュースのポイントを聞き取る力も強化することを目的にした「数字の聞き取り」を作成することにした。

５－２.「数字の聞き取り」での気付き（全２回）

数字の意味を聞き取る力をつけるために、学習者用の聞き取りシート（資料７）の問題１ではニュースに出てくる数字を提示し、その数字が何を表しているかを聞き取らせることにした。また、問題２では「聴解練習」に引き続いてニュースのポイントを書かせることにした。

第１回「派遣社員」（資料８）

このような練習は初めてであること、また派遣社員というテーマが学習者にとってあまりなじみがないことなどから、数字の意味は記述式ではなく、選択肢の中から選ばせる形式にした。その結果、全問（３問）正解者は36 名中19 名で、半数しかいなかった。特に間違いが多かったのが「この１年間に、男性の登録者数は１万２千人増えて、６万３千人となっています」という部分の聞き取りである。「１万２千人」の意味が正しく聞き取れなかった者が全体の約３分の１に当たる13 名もいた。その中で多かったのは「男性の登録者数」と間違って聞き取ったケースで、６名いた。また「６万３千人」の意味が聞き取れなかった者は36 名中14 名で、10 名の学習者が「男性登録者の増加数」と間違って聞いていた。

このような間違いが起こったのは、学習者が「男性の登録者数は１万２千人／増えて６万３千人」のように聞き取ったためではないかと考えられる。

ニュースのポイントについても「男性の派遣社員が増えている」と正しく答えたものは５名にとどまった。「派遣の登録者数が増えた」「派遣社員が増えた」「登録者数が増えた」などの中途半端な答えを書いている者が 14 名、間違った内容を書いた者が 10 名、何も書かなかった者が７名おり、ほとんどの者がポイントを正しくつかめていないことが明らかになった。

第２回「教室の国際化」（資料９）

この回は、意味を聞き取る数字が２つしかなく、テーマも外国人の児童・生徒に関するもので、学習者にとってあまり難しいものではないと判断し、記述式で書かせることにした。

その結果は、全問正解者が 36 名中６名しかいないという非常に厳しいものになってしまった。「日本語の特別な授業が必要な外国人児童・生徒の人数」を表す「１万２千人」の正解者は 36 名中９名で、「日本語を理解できない外国人児童・生徒数」などのように間違いではないが正確ではない中途半端な内容を書いた者が９名いた。また、間違って聞き取った者は 18 名で、間違いの例は「外国人の子どもの数」（４名）、「日本語を理解できない外国人」（２名）,「日本語を理解できない留学生」（２名）などであった。

「日本語が使えない外国人の児童・生徒がいる学校数」を表す「3,848 校」についても、正しく聞き取った者は９名であった。間違いの内容はさまざまであったが、その中で多かったのは「外国人の児童・生徒のために日本語教育を行っている学校数」と書いた者（６名）であった。

ニュースのポイントについては、「日本語ができない外国人の児童・生徒が増えている（１割いる）」というポイントを聞き取った者は 10 名にすぎず、ここでも間違いではないが正確ではない中途半端な内容を書いた者が５名、間違った内容を書いた者が 18 名、何も書いていないものが３名いた。

多くの学習者は、２回の練習で「数字が表すもの」を正確に聞き取れるようにはならなかったが、数字の意味やニュースのポイントを聞くことが大切だという意識付けはできたのではないかと思う。また、教師側は正確に聞き取れるように

なるためには、聴解力の他に語彙力や聞いたことをまとめる力などさまざまな能力が必要になるということを改めて認識した。

5－3．考察と改善点

なぜ多くの学習者がニュースのポイントや数字の意味が正しく聞き取れないのであろうか。本校の聴解の指導は、初級レベルでは主に『楽しく聞こうⅠ・Ⅱ』を使って行っているが、『楽しく聞こう』の問題は部分的に内容がわかれば答えられるものが多く、全体のテーマが何かを問う問題が少ない。中級レベル以降でも、メインテキストの『文化中級日本語Ⅰ・Ⅱ』の他に副教材を使って聴解の指導をしているが、それらも細かい部分の聞き取りが多く、内容全体を問う問題が少ない。そのため、学習者の多くは、部分的な聞き取りで正解を導き出せる問題には答えられるが、聴解の内容全体をつかむことができなくなるのではないだろうか。

また、「数字」に関しては、テストなどでも「○○は何人ですか」「××は何パーセントですか」のように、数字を聞き取る問題がほとんどで、数字を見てそれが何を表す数字であるかを答えさせる問題が少ないため、学習者の多くは数字を聞き取ることが目的になってしまっていると思われる。そのため、どんな桁数の数字でも一の位まで正しくメモできても、その数字が何を表しているのか聞き取れないのではないかと考えられる。

今回は中級レベルの学習者を対象に聴解指導を行ったが、「その数字が何を表しているのか」を聞き取る練習は、初級レベルから行う必要があるだろう。現在の初級レベルの授業で使用している『楽しく聞こう』でも、「電話番号を聞き取りましょう」や「値段はいくらですか」など、数字そのものを正しく聞き取れればよい問題が多いが、語彙や表現がある程度増えた段階で、「51 人というのは何の数ですか」など、数字の意味を問う問題を入れていくことも可能だと思われる。また、中級レベルでは、数字と共によく使われる「61 人に１人」や「(男性は) 12,000 人増えて、63,000 人となっている」などの表現を意識的に指導していくことも重要であろう。

今回の試みでは、たまたま「数字」というキーワードが浮かび上がったが、数字だけではなく単語だけしか聞き取っていない、または一文しか聞き取れないという場合もあると思われる。そのような学習者に対する練習を今後考えていく必

要があるという課題も明らかになった。その練習方法の一つとして「メモ」がある。今回の試みで観察されたことから、「未習語彙を書き取ること」と「メモをする方法」の２点を指導していく必要があると思われる。

聴解力の弱い学習者は知らない言葉が出てきた場合、その部分を聞き流してしまい、自分が聞き取ることができた既習語彙をキーワードと考えてしまうため、正しく内容を把握できないことがある。そのような時も、未習語彙を書き取り、自分で調べて意味を理解すれば、全体の内容理解に結びつけることができるだろう。

「メモをする方法」に関しては、今回全く指導をしなかったため、ディクテーションのように全てを書き取ろうとしてしまう学習者や、極端にメモが少ない学習者がいた。聴解練習においては、会話やモノローグを聞いた後ですぐに問題に答える形式が多く、答えをすぐ知ることができるため、メモはさほど重要ではないように思われるが、進学先でノートを取り、試験前にそのノートを見ながら復習するなどの場合を考えると、聴解練習におけるメモの練習がその第一歩とも考えられる。何をどのようにメモすればいいのか、それをどのように指導していくのが効率的かということについて、今後考えていかなければならない。

さらに今回の試みでは中途半端に終わってしまったのが「予測のストラテジー」である。今回は聞く前に学習者に質問を考えさせるという方法を取ったが、それを習慣化するまでにはならなかった。今後ニュースなどモノローグを聞かせる場合には、まずテーマを提示し、学習者がそのテーマを聞いたらすぐに頭の中で「予測」する習慣をつける練習を集中してやるとよいのではないだろうか。

最後に、「聴解練習」ではニュースを聞いた回数を毎回学習者に記入させたが、全５回の中で８割から９割の学習者が「３回以上聞いた」と答えており、中には10 回以上聞いている学習者もいた。授業中の学習者の様子や学習者が書いたシートの内容を分析したりした結果、「聞いた回数が多い者が正しい答えを聞き取れるわけではない。何回聞いてもわからない者はわからない」ということも明らかになった。教師も指導をする際にそのことを十分理解しておく必要がある。

6．その後の取り組み

2008年度4・5組の取り組みを日本語科全体に報告して、聴解に関する問題点を共有し、2009年度に聴解指導を考え直す取り組みを行った。ただ「学生に聞かせて解説をしながら答え合わせをする」のではなく、聴解の授業でそれぞれの教師がどのような目標を持って行うのかを明確にし、それに沿って授業を行うこととした。

特に初級では、『楽しく聞こう』の授業の進め方を考え直し、各クラスで様々なアプローチを模索した。特に全体で共有したのは『楽しく聞こう』教師用手引書にあるような指導の手順、「話題導入や新出語彙の説明、絵を見せるなど、聞く前の準備をした後で、学習者にＣＤを聞かせる」という流れは見直す必要があるということ、また、学習者にメモを取ることの重要性を伝える必要があるということ、さらに、常に会話やモノローグを聞いた後、問題に答えるという形式ばかりでなく、純粋に物語を聞いて楽しむといった聞き方もあるということなどである。

ここで『楽しく聞こう』を使った授業例をいくつか紹介したい。

授業例1．第25課「お祝いのプレゼント」

この課のⅡは、２人の会話を聞いて、最終的にどのプレゼントを贈るかを聞き取って絵の中から選んで記号を書くというタスクであった。そこに、会話を聞きながらメモを取る練習を取り入れ、「何のプレゼントか」「そのプレゼントに決めた理由」などをメモするというタスクを加えた。新出語彙の意味確認はメモを取った後に行い、知らない言葉であっても、まずはメモするという習慣を身につけさせることを目指した。(資料10参照)

授業例2．第32課「日本の昔話」

第32課のⅡは、「物語を聞いて大意を把握し、結末を予想する」という目的が挙げられており、物語を聞きながら絵を並べ替えるというタスクであったため、タスクを遂行できればよいという結果になりがちであった。そこで絵の並べ替え問題をなくし、本来の物語のように絵を見ながら物語を聞き、純粋に物語を楽しむ、そして最後の結末だけを予想するという形の教材に作り変えた。また、結末も予想しやすくするため、４つの絵の中から選ばせ、理由を言わせる形式にした。(資料11参照)

7．今後の課題

2009 年度の日本語科での取り組みの結果、各レベルでさまざまなアプローチの聴解練習が行われるようになり、本校での聴解の指導は改善されつつある。しかし、聴解力が伸びない学習者に対して有効な指導方法を確立するところまでには至っていない。実際、2008 年度４・５組の聴解試験の結果は、それまでとほぼ変わらず、その後も聴解力が飛躍的に伸びたという客観的なデータは得られていない。従って、今後もこのような取り組みを引き続き行い、指導方法を模索していかなければならない。

また今後、聴解の指導方法、教材などについて考える際、可能な限り行っていきたいのは「個別指導」である。2008 年度の取り組みはＬＬを使って各自が自分のペースで聞きたいだけ聞きながら完成させたタスクシートを回収し、分析するという方法で行ってきた。現在本校にはＣＡＬＬ[注7]システムが導入され、これまで以上に個別指導の環境が整った。数多くの練習問題を作り、学習者が苦手な部分を個々に練習することも可能になった。ここで課題として挙がっている予測ストラテジーの強化、数字の聞き取りなども、学習者各自のレベルに応じた練習が可能だろう。これからはそのような個別指導も視野に入れつつ、日本語科全体で各レベルの聴解の目標を明確にし、教材や指導方法を開発していきたい。

注

（1）ＬＬ教室とは学習者用ブースと教師用のコントロールブースからなる教室で、学習者はブースのテープレコーダーとマイクつきヘッドホンを使って練習をするものであるが、今回は聴解の授業で使用したため、学習者はブースのテープレコーダーを使って個々に聞く練習をした。

（2）文化外国語専門学校 (1992)『楽しく聞こう Ⅰ・Ⅱ』凡人社

（3）初級後期とは『新文化初級日本語Ⅱ』を学習している期間を指す。

（4）中級後期終了レベルとは『文化中級日本語Ⅱ』第８課まで学習するレベルを指す。

（5）中級前期とは『文化中級日本語Ⅰ』を学習している期間を指す。

（6）聴解練習にかける時間は 15 ～ 25 分程度で、50 分の授業時間を全て聴解練習に使ったわけではない。

（7）CALL とは「Computer-Assisted Language Learning」の略である。

参考文献

（1）国際交流基金 (2008)『国際交流基金　日本語教授法シリーズ５　「聞くことを教える」』ひつじ書房

（2）三井豊子・堀歌子・森松映子 (1998)『ニュースで学ぶ日本語　パートⅡ』凡人社

資料１　「予測しながら聞く練習」学習者用質問シート

１．これから「　　」についてのニュースを聞きます。聞く前に、ニュースについて知りたいと思うことを質問の形で書いてください。

質問１．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

質問２．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

質問３．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

質問４．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

質問５．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

２．ニュースを聞いて、質問の答えを書いてください。答えが見つからなかった場合は「？」を書いてください。

３．質問のほかにわかったことがあったら書いてください。

＊何回聞きましたか。
１回　　２回　　３回以上

資料２　『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』ニュース13「地震」(スクリプト)

今日午後６時30分ごろ、東北地方に地震がありました。各地の震度は次の通りです。震度４は郡山、白河、震度３は仙台、福島、震度２は盛岡、会津若松などとなっています。この地震による津波の心配はありません。気象庁の観測によりますと、震源地は福島県沖で震源の深さはおよそ60キロ、地震の規模を示すマグニチュードは5.7と推定されています。

この地震の影響で東北新幹線が一時運転を見合わせましたが、数分後には運転が再開されました。

資料３　『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』ニュース９「修学旅行」(スクリプト)

修学旅行協会は、全国の公立高校が選んだ昨年度の修学旅行先をまとめました。協会の発表によりますと、昨年度修学旅行を海外に決めた公立高校は233校で、参加した生徒は、およそ４万２千人にのぼりました。行き先は、韓国と中国が最も多く８割を占めています。一方多様化の傾向も見られ、シンガポール、マレーシアなどアジアの国々やアメリカ、オーストラリア、ヨーロッパへ行く公立高校も増えています。海外旅行が増えた背景には、円高の影響が大きく、韓国や中国なら四泊五日で10万円前後と、旅費が国内とあまり変わらないことや、またアジアの隣人に目を向けるという教育的意味もあるようです。

資料４　『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』ニュース24「大学生の生活費」(スクリプト)

大学生の年間生活費が、２年前にくらべて５％減っていることがわかりました。文部省の調べによりますと、大学生の学費や食費、光熱費など、年間の総支出は平均184万６千200円で、このうち学費を除いた生活費が83万７千300円となり、２年前より４万６千円減ったということです。生活費の中でも、特に娯楽や交際費など遊びのための支出が目立って減っています。不況が長引いているために、最近はアルバイト収入が少なくなっているのに加え、授業料など学費も増え、リッチといわれた大学生にも生活費を切り詰めざるを得ない様子がうかがえます。

資料５　『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』ニュース12「登校拒否」（スクリプト）

登校拒否の児童・生徒が急増していることが、文部省の調べでわかりました。昨年度に登校拒否で、年間30日以上、小・中学校を休んだ児童・生徒は、およそ９万４千人で前年度より１万３千人も増えました。増加率は15.5%と、この５年間で最高を記録しています。調査結果によりますと、30日以上の欠席者のうち「学校嫌い」を理由にあげた児童・生徒は小学校が７万４千757人でした。一方、現在の児童・生徒の数は、小・中学校とも過去最低を更新しています。このため、登校拒否の比率は、小学校で416人に１人、中学校で61人に１人となりました。

資料６　『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』ニュース５「たばこの煙」（スクリプト）

大阪府の医師が胎児とたばこの煙の害について、日本産婦人科学会で発表しました。母親がたばこを吸わなくても、たばこの煙に囲まれていると、生まれてくる赤ちゃんの体重は、平均100g以上少ないということです。母親が妊娠をきっかけに禁煙をしても、家族や職場の同僚の煙にさらされていると、一日にたばこを３本から５本吸うのと同じことになるということですから注意が必要です。

資料７　「数字の聞き取り」学習者用聞き取りシート

聴解練習（数字）①－１　ニュース

問題１　次の数字は何を表していますか。正しいものを選び記号を書きなさい。

①１２，０００人（　　）　　②６３，０００人（　　）

③１４０，０００人（　　）

ア．派遣社員の道を選ぶ人

イ．ある人材派遣会社の男性登録者数

ウ．ある人材派遣会社の女性登録者数

エ．ある人材派遣会社の男性登録者の増加人数

オ．企業のリストラにあった中高年の管理職の人数

問題２　このニュースの一番大切なポイントは何ですか。

資料８　『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』ニュース 36「派遣社員」（スクリプト）

派遣社員といいますと、これまでは女性の働き方のように思われてきましたが、男性にも派遣社員の道を選ぶ人が増えています。

大手の人材派遣会社の話によりますと、この１年間に、男性の登録者数は１万２千人増えて、６万３千人となっています。このうち、20 代が 37％、4、50 代が 28％を占めています。バブル崩壊のあと、企業のリストラにあった中高年の管理職や、会社にしばられたくないという若者が目立っています。

一方、この人材派遣会社に登録している女性は 14 万人で、男性登録者数の２倍以上ですが、登録者数の伸び率は男性の方が高いということです。

企業にとっては、必要なときに必要なだけ人材が使えるとあって、派遣社員の要望が増えているということです。

資料９　『ニュースで学ぶ日本語パートⅡ』ニュース 15「教室の国際化」（スクリプト）

日本語がよく使えないために、特別な教育が必要な外国人の児童・生徒が公立の小学校、中学校に１割いることが文部省の調査でわかりました。昨年、全国の公立の小・中学校について調べたところ、日本語が理解できないために、学校で特別な日本語教育が必要な外国人の子どもの数が１万２千人にのぼりました。２年前の調査より１割も増えていることになります。

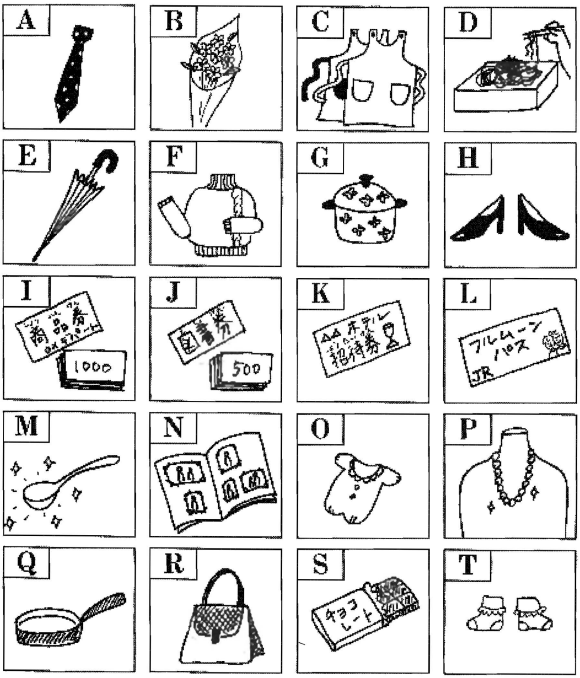
日本語が使えない外国人の児童・生徒がいる学校は、全体の 11％にあたる３千 848 校で、前回の調査よりも 143 校増えています。文部省は「学校間の情報を交換して、指導方法を質的に高めていきたい」と話しています。

資料10 『楽しく聞こうⅡ』Ｌ２５「お祝いのプレゼント」学習者用プリント

Ⅱ．会話を聞いて、どのプレゼントに決めたか、記号を書きなさい。

また、何のプレゼント（何のお祝い）か、そのプレゼントに決めた理由もメモしなさい。

	記号	何のプレゼント？	そのプレゼントに決めた理由
例)	S，E	バレンタインデー	きのう　かさをなくした



資料 11 『楽しく聞こうⅡ』 L 32「日本の昔話」学習者用プリント (1/2)

Ⅱ. CD を聞いてください。

＜ことば＞

［墨／薬］を塗る　火をつける　ひもで縛る ⇔ ひもをほどく

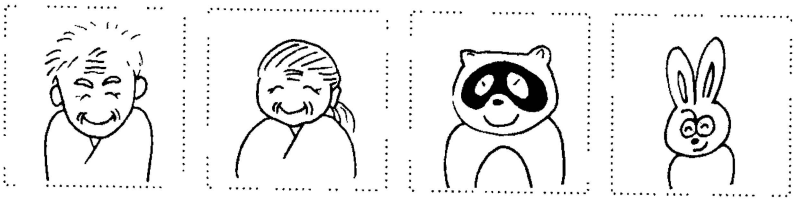
盗む　捕まえる　殺す　［木を］背負う

棒　棒で打つ　(お) もち　焼く

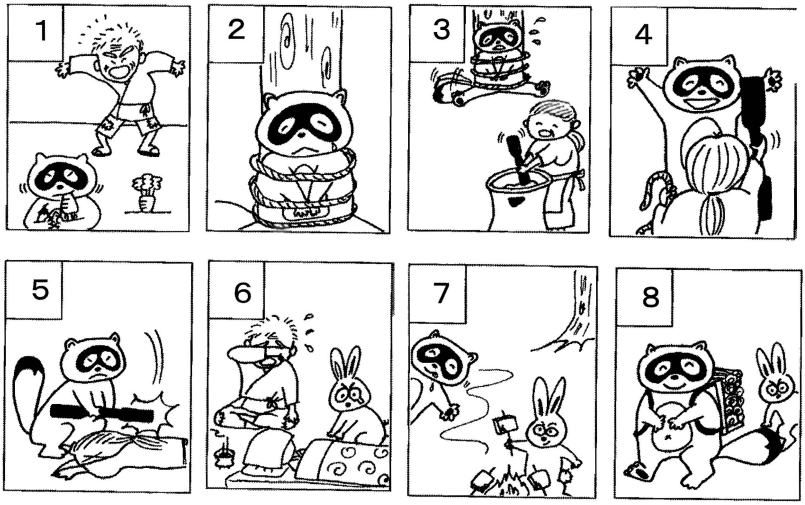
［木を］運ぶ　やけど　辛い味噌

＜登場人物＞

おじいさん　おばあさん　たぬき　うさぎ



＜物語＞

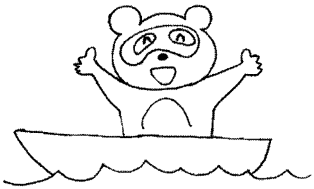


資料 11 『楽しく聞こうⅡ』 L 32「日本の昔話」学習者用プリント (2/2)

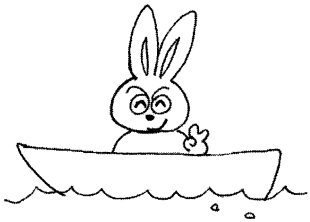
＜話の続き…＞

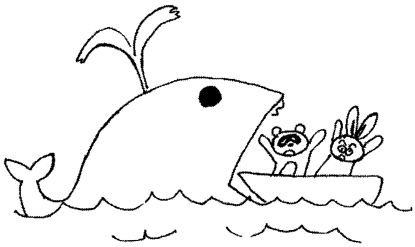
やけどをして寝ていたたぬきは、お見舞いに来たうさぎと一緒に海へ行きました。
その後、2匹はどうなったでしょうか？

A.



B.



C.

D.